京都いけばなの四季

桑原仙溪
桑原素子

花ふたり

花ふたり

京都いけばなの四季

桑原專慶流家元
桑原仙溪　桑原素子

婦人画報社

ISBN4-573-14208-8 C3076 P6500
定価6,500円（本体6,311円）

花ふたり

京都いけばなの四季

桑原仙溪
桑原素子

婦人画報社

目次

風土　桑原仙溪……4
はな五十八年　桑原素子……6
一月――立て砂　立て花……10
二月――底冷えの日々……18
三月――娘達と雛祭り……26
四月――きよみずさん……34
五月――花あわせ……42
六月――弥勒菩薩……50
七月――屏風祭り……58
八月――北山から伏見へ…賀茂川……66
九月――東山の薄……74
十月――烏丸通……82
十一月――庭掃除……90
十二月――神様方の師走……98
作品解説……105

風土

「花ふたり」は、昨年七月から今年の六月まで一年間いけ続けた私達の鋏の記録である。そして、その間に考え合ったこと、感じ合ったこともまとめて書き添えた。

私達のいけ花は、京都という風土、すなわち一つの社会とそれを取りまいている空間と自然によって作り上げられてある。私達は本も読むし、発達した情報機関のお蔭で多くの知識も得ている。

だがその知識もいけ花という形をとるときには、必ず京都という風土に濾過されているようである。花をいける者にとって、住む土地は大切なものである。

例えば四月六日という日、京都では桜が満開だが、鹿児島ではすでに散り終わっているし、青森ではまだ蕾は固い。四月六日の意味も地方によって多少異なっているのである。そんな小さなことが積み重なって一つの風土に根をおろした社会が出来上がり、その文化の一端として私達のいけ花も流祖冨春軒以来三百年間続いてきたのである。

この本を作りながら流祖冨春軒の「立花時勢粧（りっかいせいすがた）」や先代の「桑原専溪の立花」「専溪生花百事」を読み通していると、そこにはまぎれもない京都が横たわっている。

副題を「京都いけばなの四季」としたのは、私達にも同じことが言えそうだからである。

京都にも嫌な面はたくさんある。だが私達は京都が好きなのである。そして生きて行くうえでの美しい証（あかし）を得ようとして、この本も出来た訳である。

当然のことながら「花ふたり」も私達だけの力で作れるものではない。流内の皆さんの支え、花材集め、写真、そして出版を御奨めくださった婦人画報社の皆様に御苦労をおかけ申し上げましたと、感謝の他に言う言葉がない。

一九九一年十一月

桑原仙溪

はな五十八年

父専溪（十三世）は明治生まれの、律義だが一方権威主義的な人だった。私はその長女として生まれ、父がいけ花を始めさせたのは六才の春からだった。それはいけ花を始めたというよりは、花に触れながら少しずつ家元という環境に馴染んでいく過程だったのかもしれない。

自立心が芽生えた十三才から十八才までの間、頭の中では家業を継がなければならないと思っていても、その気持ちになるのはなかなか難しいものである。

私が花道家であることを自覚するようになったのは十八才で、高校を卒業すると同時に父の許しを得ていけ花を教え始めた時からである。ちょうどその頃、京都の花道家で結成する紫紅社があり、その第五回綜合展に初出品した。当時、昭和二十七年はまだ戦後の混乱期が続いていたが、花道家達は自分を励ましながら意欲的な制作に夢中になっていた。

色々な花道展に出品しながら二十二才で結婚し、三十四才でこの結婚生活は破綻してしまったが、いけ花活動を主軸に目まぐるしい毎日であった。昭和三十一年いけばな世紀展の折には受賞、またその後いけばな百人展と毎年開催される出品に慌ただしく歳月は過ぎていった。二十五才で東京の大森に住居を移し、弟子を教えながら東京の花道家との交流が始まる。渋谷東横デパートでのいけばな美術展で特選受賞を受け、また知名人とのいけ花女流展に発表したり、婦人雑誌、週刊誌にも取り上げられもした。その後京都に帰り、私の流の運営に参加し、流展、個展等、育児の世話とともに大変多忙な時期であった。京都の華道京展にも毎年出品していた。

三十六才で仙溪と結婚後、初めてＮＨＫの婦人百科を二か月間担当する。そして仙溪・素子二人展を京都朝日会館で隔年に開催しながら充実した日々を送ってきた。

父とはいけ花への希求は同じではない。若い頃オヴジェ的な創作花も作った。いろいろな経験を経て、今確かにつかめたことは、いけ花本来の自然を基礎にした精神的な心の拠りどころ、自然への回帰、その草木の美しさを肌に感じいとおしみながら、これからもずっといけ続けていこうと思う。今回皆様の御力添えで出版させて頂きほんとうに幸せである。

一九九一年十一月

桑原素子

花ふたり

京都いけばなの四季

●協力者一覧

賀茂別雷神社（上賀茂神社）
ホテル嵐亭
伏見稲荷大社
新井邸
南禅寺
清水寺
大田神社
広隆寺
伴邸
たん熊本家
京大和
東本願寺
深見邸
高島屋京都店

講談社
日本放送出版協会

●撮影

桂　俊夫
宮野正喜

小林庸浩（17頁）
中村　淳（55頁）
川村趣夫（82―83頁）

●デザイン・装丁

林　忠

一月——立て砂　立て花

上賀茂神社は都雅なお社（やしろ）である。

そこには私達の想像する平安朝の面影（おもかげ）が残されていて、雪、花、水、月と、ものやわらかに四季が通り過ぎていく。

京都の冬、雪は北山の麓（ふもと）、上賀茂のあたりから降りはじめ、私の住む中京の空が雪雲に覆われる頃には、一と足先に上賀茂の社殿の桧皮屋根（ひわだやね）はもう淡雪に彩られている。

立て砂の前に立花（りっか）を献じる朝、祭神の賀茂別雷命（かものわけいかづちのみこと）は雪を御供（おそな）に天から真の枝に舞い降りて、私の願いを叶えてくださった。命（みこと）は立て砂の間をお通りになって社殿にお入りになるのだろう。薄明かりの早朝、音もなく降り積む雪の中の立花、私の夢だったのである。

仙渠　背景／上賀茂神社立て砂　花型／立花砂の物　花材／白梅、紅梅、松、水仙、椿、晒木（しゃれぼく）　花器／青銅砂鉢

仙溪　花型／水仙一色立花　花材／水仙、山茶花（さざんか）　花器／青銅香爐　掛軸／塩川文麟

仙溪　花型／立花　花材／枝垂柳（しだれやなぎ）、杜若（かきつばた）、躑躅（つつじ）、栂（とが）、椿、枇杷の葉
花器／白金彩花瓶　寺池静人作　掛軸／塩川文麟

白川砂の敷きつめられた上賀茂神社の細殿の前には円錐形の立て砂一対が並び、その頂点に雌雄の松葉が挿されている。

それは神の依代を立てるという古代の樹木信仰が時と共に洗練を重ね、この典雅な姿にまで昇華したものであろう。立花も古くは立て花と呼ばれ、その心は同じ歴史を辿って、未だにいけ花の底流として生き続けている。

立て砂の頂上の象徴的な松葉、そして松そのものは立花に用いられる諸木の最上位におかれ、名作といわれる数々の立花で主役を演じてきたが、松一色の立花も花型が真、行、草の三態に変わっていく。そこに古代の樹木信仰から詩的な自然観に行きつ戻りつ揺れ動いている日本人の心が興味深く読みとれるように思う。松の立花は無心にのびのびと歪みなく立つ若松の姿で表現する真の花型から、崖に根をはり風雪に耐えて雄々しく生きる姿を象った草の花型（砂の物）に変化していく。そして、その伝承は江戸時代の後期、松の生花（下の写真）を経て現代花にも引き継がれている。

年の始めは依代の松が恭々しく飾られているが、松の内を過ぎる頃、鴨川の橋の上で柳を眺めていると、時折小雨が走り白鷺が飛び立つ。柳の立花には京都の南、城陽の温かい湧水に季ならず咲いた杜若を添えて、京都の冬を心に刻みこむ。

小さな水仙の立花は私の手なぐさみでもある。

仙溪　花型／生花　花材／五葉松　花器／紫天文青銅立花瓶

仙溪　花型／松一色立花　花材／五葉松　花器／雲龍条紋花瓶　森野泰明作

元日の朝、お祝いの用意の整った奥の間の襖をあけると、花の香が静かに流れてくる。

毎年好んでいける梅に水仙、仏手柑（ぶっしゅかん）の放つ芳香は、一と夜閉じこめられていた部屋の冷気にひきしまり、凛然とした香気に高まって、席につくものを年頭の改まった気持ちに誘いこむ。

私はお正月を大切にしている。葬儀以外に厳粛な宗教的行事のない私達に、何千年かこの風土で暮らし続けた祖先との宗教的なつながりを深く感じさせるのが、お正月の習俗である。それは神社の祭礼のように氏子が集まって行なわれるものではなく、全く個人の、そして家族という内輪の節会（せちえ）なのである。

元旦という日をそう思っている私は準備にかなり手間をかける。大晦日までの三日間は、掃除、料理からお墓の掃除まで、すべて手落ちのないように家族全員がそれぞれの役割を果たすようにしている。また、そこで物の美しさを知る機会にも恵まれる。私は父に命じられて庭掃除をしているうちに少しは庭のことがわかるようになったし、母に教わった料理を手抜きせずに作っていると、ものの味はこうあるべきかと気付くようになった。良いものは子供にも伝えたい。そのためには代々息を長く洗練を重ねていかなければならないのだが、いけ花の家元とは花をテーマに代々そのような暮らしを続けている一家であろうか。

素子　背景／自宅床の間　花型／投入　花材／カトレア（白、ピンク）、仏手柑（ぶっしゅかん）、シンビジウムの葉
花器／康熙年製瑠璃釉花瓶　掛軸／竹内栖鳳

二月——底冷えの日々

18~19頁の作品：素子　背景／伏見稲荷大社　花型／吊り花　花材／杉、小手毬(こでまり)、連翹(れんぎょう)

伏見稲荷大社は全国に四万社もある稲荷神社の総本社である。

都雅な雰囲気の洛北上賀茂神社と違って、ここ洛南に商人の守り神として鎮座なさる伏見のお稲荷さんには、現世の豊かさを願う人人の熱い祈りが、奥山の頂上まで隙間なく参道に立ち並べられた朱塗りの鳥居の数に象徴されている。

伏見稲荷では初午の日、祈願成就の標(しるし)の杉が授与される。その杉にあやかって杉玉を作り参道の鳥居に吊るさせて頂いた。緑の玉に早春の連翹と小手毬を挿し、私達なりの幸せをお祈りしてきた。

節分、初午の頃、京都の街は底冷えに包みこまれてしまうので私も書斎に籠(こも)る日が多くなる。書斎は広くて静かな洞窟のようで、居心地がよい。

私達の友人である新井さんの書斎は、広い窓から御室仁和寺の塔、その先比叡山まで広々と見晴らしが続く。窓辺の李朝白瓷の大壺に、柳に牡丹と蘭を添え古仏を飾ると、冬の日が静かに暮れていく一刻(ひととき)を閑談で送るこの上ない場となる。

素子　背景／新井邸書斎より仁和寺、東山を望む　花型／投入
花材／枝垂柳、寒牡丹(かんぼたん)、オンシジウム　花器／李朝白瓷壺

素子　花型／盛花二瓶飾　花材／アネモネ、黒芽柳　花器／ガラス鉢（レッド、ブルー）　ドン・ゴンザレス作（アメリカ）

樅林の厚く積もった落葉の下にうずくまっていたアネモネは、暗くて長かった北欧の冬がもう終わりそうになっているのを知ると、皆元気に起き上がって一斉に白い花を咲かせるそうである。その花は日本の一輪草によく似ている。

その頃南欧の地中海沿岸では赤や紫のアネモネが咲く。アネモネ・コロナリアという種類で、明治時代の初期から日本でも栽培されている。

アネモネは昭和の初め頃の一時、都会人好みの花としてもてたらしいが、それは多分南欧への憧れがアネモネという甘美でエキゾティックな名前と重なり合って、そんな気持ちを呼びおこしたのだろう。わざわざ付けられた紅翁草という和名は使わず仕舞で忘れ去られてしまったようである。

風もなく曇る日は、じっくりと寒い。二月の京都は底冷えの日が続く。昔の人達はそんな日を暗い部屋の中で火鉢と重ね着で耐えていたが、もうそんな暮らし方をしている家はほとんどなくなった。明かるく暖かい居間には赤や紫のアネモネをいけて、底冷えの日々を忘れようとしている。

江戸時代のいけ花の伝書を見ると、渡来したばかりではないのかと思われる花卉類がかなり使われている。だが現代と違って遠い外国から切花が空輸されてくるわけではなく、少量の種や苗を日本の風土で数年がかりで育て上げ、ようやくいけ花にも使えるようになったものなのである。渡来した花もその数年の間に緻密に観察され、いけ花としての自然が正確に把握できていたのである。

そういう過程を経ていけ上げられた花は、伝書の中で、古くからいけ続けてこられた伝統花の間にまじっても遜色なく、自信に満ちた姿で頁を飾っている。ともすれば色と形で一作をいけ上げてしまう現代の私達にとって、示唆に富んだ花型図である。

仙翁　花型／生花二瓶飾　花材／フィロデンドロン、白花アイリス、アマクリナム、アマリリスの葉　花器／中東製彩文花瓶・黒色海鉢

三月——娘達と雛祭り

東山の向こうが幽かに明かるみ始めると、小さな鳥が庭の椿を目ざして飛んでくる。遠くの方で蜜を吸いながら囀っている間は夢現で聞いているが、寝室の窓辺まで鳴き声が近寄ると快く目覚めてしまう。

小鳥に起こされた朝は京都御所まで散歩する。ごくたまに娘達もついて来る。二人がまだ小さい頃、歩きながら「御所のことを昔は内裏といって、お雛さん達お二方はここに住んでらしたのだ」と話したところ、怪訝な顔で「こんな所誰も住まはらへんわ」ということだった。家に飾った享保雛の作られた頃、内裏のお二方はこんな表情で毎日お暮らしになってらしたのだろうか。私も訝しく思うものの毎年桃に青麦を添えて飾り続けている。

素子　背景／自宅床の間　花型／掛花・盛花
花材／枝垂桃（しだれもも）、麦　花器／煤竹掛花器・朱塗長水盤

「良い花屋というのは、家元が使おうとする花材を差し出したとき、そのままスッと挿してもらえるような花を見つけることです」と、先年物故した大阪の花屋の長老が言っていた。

その家元と花屋のつき合いは二人の若い頃からのものだったそうだが、どんどん高い境地に昇りつめていく家元に花材の目利(きき)として成長し続けた花屋だった。

いけ花展の出品作も大作となると、主材選びにかなりの日数と人手がかかる。私の花屋も花集めに夢中になる人だが、その花がうまく活かされたとき、「うまいことといきましたな」とだけ言って微笑(ほほえ)む。そこで私もほっとして鋏を擱(おき)く。

仙渓　花型／立花妙の物　花材／木瓜(ぼけ)、梅吾枝(うめこけえだ)、牡丹、あらちぎ、黒白の木　花器／方型染付花器　市川蘆三作（花の名流展出品作　高島屋京都店）

以前住んでいた家の隣のお寺に白木蓮の大木があった。高さ十五メートルほどもあるその木の下に立つと、目の前の大輪の白い花の群は上へ上へと膨らみ続けて、少し後ろに下がると目の前に入道雲が沸き上がったように見える。

ほんの少しだけクリーム色がかった花の入道雲と、やわらかで暖かな春の空色の間に、霞が風に流されると、白木蓮の大樹がのしかかってくるような、重く底知れない威圧を感じる。

白木蓮の白さは夜になっても桜のように輪郭が暈かされない。月の光を大きな力ではねかえすように、夜空に向かって大きな体を浮かび上がらせている。

だがその白い巨体に力をみなぎらせているのは一週間ぐらいのものだろうか。下の方から花は黄変し始めるが、それを真新しい若葉が急いで包み隠すようにひろがっていく。その美しい変身の早さは見事なものである。

若葉色に身を包んだ巨大な白木蓮を、老木と呼んでいいのだろうか。そこに立ちつくしているかぎり、何百年経とうと、毎年春になると生まれたばかりの若さで暮らし始めるのである。

その不思議さは科学の力以前のものである。古代の人が樹木の生命を、人間や動物とは異質な生命として捉え、同じ地上に住む隣人を畏敬の眼差しで見上げた気持ちがよくわかる。

仙溪　背景／南禅寺山門　花型／投入二瓶飾　花材／白木蓮（はくもくれん）、朱木瓜（しゅぼけ）　花器／印花文花瓶　近藤豊作

植生に恵まれなかったアルプス以北のヨーロッパに、急速に花の種類がふえはじめたのは、十六世紀頃からのことだそうである。

そして現在、私達が西洋の花だと思いこんでいる花の八割ぐらいは、ヨーロッパ以外の世界の各地から集めてきて栽培に成功し、品種改良されたものである。

日本の花屋でこそ、未だに自国の花を季節の切花として洋花と一緒に並べているが、ドイツの花屋でドイツ原産の花を買おうと思ってもなかなか見つからないし、冬は皆無に近い。

冬が長く春や夏にも大して気温の上がらないヨーロッパの北の方で、温暖な国の色鮮やかな花を育てる場合、かなり大がかりな設備と管理技術が必要である。そして管理技術の発達によって、それぞれの花の咲く自然条件を人工的に作り出せるようになった時、季節という花の大切な価値が置き去りにされてしまった。

もちろんヨーロッパにも季節の花がない訳ではなく、長く暗い冬が終わったとき、一斉に咲き始める花の春を皆が待ち望み、季節を謳歌し、美しい詩や音楽も生まれている。その季節の謳歌と季節の置き去りの矛盾はどうして起こったのだろう。

日本でも近頃では花作りと季節の間にかなり矛盾が大きくなってきているが、フリージアも洋花とはいえ、日本に根付いて私達には早春の花だった。いつまでもそうあってほしい。

素子　花型／投入　花材／フリージア　花器／メキシコ民芸ガラス花瓶

四月――きよみずさん

仙溪　背景／清水寺本堂　花型／立花　花材／桜、牡丹、枝垂柳、松　花器／飴色釉花瓶　清水六兵衛作

いつか清水さんの本堂の舞台に桜の立花を供えさせて頂けないかな、と思っていたところ、この春御本尊の脇に私の桜を立てる御縁を授かった。

清水さんと心安く呼んでいるが、清水寺は昔から庶民にとって最も身近さを感じるお寺だった。東山の中腹から京都を見下ろす景観、国宝の本堂、奈良仏教の格式を持ちながら開かれた寺として庶民が親しみをもって信仰し続けてきた。建てられたのは延暦十七年、征夷大将軍坂上田村麿の寄進によるものだそうだが、以来千二百年の間に何度も火災にあっているが、その度に人々の厚い観音信仰によって再建されてきた。

本堂に桜の立花を立てさせて頂いたのは、有難いことに山内の桜が開く直前の三日間だった。

前日に家で九分通りいけ上げ、それを解体して本堂に運びこんだのは翌朝まだ暗いうちだった。運びこんだ桜をもう一度組み上げて完成した午前八時頃には、もうかなりの参拝客で賑ってくる。

奉納した立花は朝晩手入れに通う。

寺院の朝は早い。清水寺も午前六時に開門される。開門されると早々とお詣りに入って来られるのは地元の方だろう。本尊の前で掌を合わせたあと、手直ししている私に「仙渓さんの桜の立花どすか。昨日の朝より花が開いてきましたな。はんなりしてよろしおす」と声をかけてくださったりする。

桜はいけ花の歴史の上でもかなり早くからいけられた記録が残っている。清少納言が青瓷の花瓶に挿された桜の大枝の美しさを「枕草子」に書き記したのが、十世紀末のことである。その頃清少納言は清水寺に参籠していたが、ひょっとすると彼女も御本尊の千手観音に桜をいけてお供えしたことがあったかもしれない。

一寸法師のお話では鬼を退治した場所は清水寺の参道だったらしい。当時の参道は鬼がいても不思議ではないほど寂しい所だったのだろうか。だが戦乱の最中でもない限り、五条の橋から清水坂は願い事をかかえてお詣りする庶民の姿が絶えることがなかっただろう。

清水の観音様はお優しい。高位の女官の願い事も、庶民のささやかなお願いにも一つ一つ耳を傾けて、良い分別を授けてくださる。お寺ができて千二百年もの間、どれほどの人が思案に余ってここへ掌を合わせに来たことか。

素子　花型／盛花　花材／チューリップ8種　花器／白色陶水盤 竹内真三郎作

江戸時代は鎖国のせいでオランダ、中国、朝鮮の三国だけしか交流することがなく、それも長崎の出島という狭い門しか開かれていなかった。

だが二百年以上続いた鎖国時代にも、かなりの種類の洋花が渡来して日本に根をおろしている。

チューリップ、アマリリス、カーネーション、グラジオラス、カラー等の他、現在ポピュラーな洋花の大部分はこの時代に栽培が始まっている。

ところで洋花という名前は多分西洋から来た花という意味なのだろうが、そのほとんどは西洋の花ではなく、この頁のチューリップは中近東、次の頁のアマリリスは南アメリカ、カラジウムも南アメリカが原産地で、白百合のカサブランカは日本の白鹿の子がその親らしい。こうしてみると、洋花とは一体どういうものなのか考えこまざるを得ない。

西洋人だと思ってつき合っていた人が実はアフリカ人だったというのでは困るのである。

花はその出生、来歴をよく知ったうえでいけるのが日本のいけ花だった筈である。

素子　花型／投入　花材／アマリリス、白百合（カサブランカ）、カラジウム　花器／斜縞紋ガラス花瓶（フランス）

若狭の山は南にのびて、上賀茂神社の裏山まで続いている。夜が更けると深い山の裾に建てられた神殿の辺りは濃い闇に閉ざされる。楢の小川はときおり木の間を洩れる星影を映すだけで黒々と流れ、山伝いに京都を覗きに出てきた梟の声が木立の上から聞こえてくる。

楢の小川は、本殿の西側を流れる御手洗川に東から流れてきた御物忌川が合流すると、川幅五メートル程の楢の小川と名前を変える。さらに境内の東を南に下って外に出ると明神川となって、社家の土塀の下を風雅に通り過ぎていく。

流れの夏は子供の遊びに活気づき、初冬丸々と肥えた酸茎大根を洗う頃には年の暮も間近い。

素子　背景／上賀茂神社楢の小川　花型／盛花　花材／石楠花（しゃくなげ　紅・白）、岳樺（だけかんば）　花器／藤蔓製の賀（み）

五月——花あわせ

仙溪　青磁／大田のRの壮若　花型／投入　花材／藤、牡丹　花器／「影風」宮下真爵作

葉桜が淡い翠（みどり）の影を池に映すようになると、毎年のように大田の沢の杜若（かきつばた）の紫を思い浮かべる。

大田の沢は洛北大田神社の社前の小さな沢だが、平安時代から、あるいはそれ以前からかもしれないが、杜若の花の美しさで知られている。

北山の麓は昔、沼沢地が多かったそうだが、今では深泥池（みぶがいけ）と大田の沢だけしか残っていない。だが共に天然記念物として、深泥池の古代水生植物や大田の沢の杜若の自然群落が現在まで生き続け、大都市に変わった京都の古い昔を私達に想い起こさせる貴重な一画となっている。

新緑の木立に囲まれた大田の沢は作られた庭園ではない。ごく当たり前の自然がただそのまま残った一画かもしれないが、そこに千年、あるいは二千年以上も杜若が暮らし続けているのである。

藤と牡丹をいけた日、沢の杜若は今年最も美しく花の咲いた日だった。だが、明かるい午後の陽差（ひざ）しを受けて清楚な薄紫に群っていた杜若は、夕方から刻々と紫の色を深めつつ、ついには濃紫の夜の闇の中に沈みこんでいく。

それを幽玄と見ればよいのか、妖艶と思えばよいのか。歳を経た杜若の不思議を見たのだろう。

仙溪　花型／生花　花材／牡丹　花器／大弦籠　小曽公長算作

この月は、藤、牡丹、あやめと頁が続いているが、花合わせでは、藤が四月、あやめは五月で、牡丹が六月になっている。

花合わせという遊びは、トランプにヒントを得たようなカードに四季十二か月の花をふりあてているところがまず日本的だが、そのルールもまた日本的なもので、欧米人には理解し難い独特な規則性で点数を争うものだそうである。

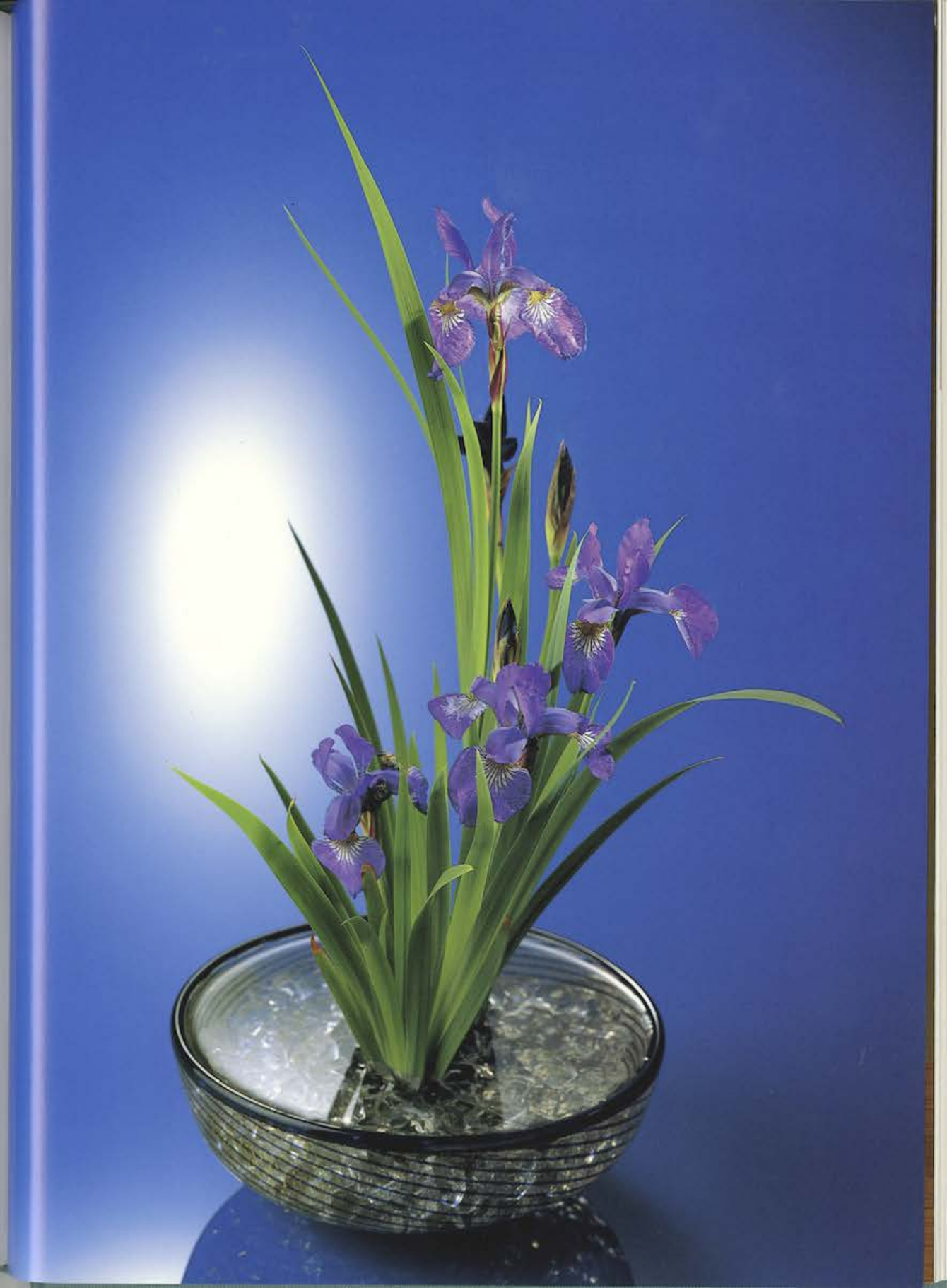
私の住む中京（なかぎょう）室町（むろまち）の呉服問屋、上京西陣の機屋（はたや）さん達は一寸（ちょっと）暇ができると、すぐ座敷に花札を持ち出してきて、座布団の上で八八というゲームを始めている。

感心なものである。着物の模様は季節の花が主題になる。昼間はその花をどんな柄行（がらゆき）にしようかと散々知恵を絞った挙句、息抜きの遊びにまで花との運の巡り合わせに一喜一憂して、夜の更けるのも忘れていたのである。

花合わせでは五月の花を「あやめ」と呼び慣らわしているが、花札の絵は八つ橋の畔（ほとり）に咲く杜若のように思える。

あやめは花が小さくて葉も細く薄いので、地味に見えるうえに挿しにくい。したがって花屋にもあまり売っていないが、いけてみるとかわいい野生とでも言えそうな魅力を感じる花である。

同属の杜若や花菖蒲とあやめを比べてみると、ちょうど椿と山茶（さざん）花のような違いが感じられる。



仙溪　花型／生花　花材／あやめ　花器／ガラス鉢 岩田糸子作

藤に牡丹に杜若、あやめと続いたが、五月に出てこなくてはならないのが花菖蒲である。

江戸時代の終わり頃、私の家で稽古していた人がその日習ったことを記帖したものが残っている。

花菖蒲の頁を開いてみると、花菖蒲を幾種類も集めていけるのもいいものであるとして、あまり上手な絵とは言えないが、二十五輪ほどの花を大きな水盤にいけた写生画が描き添えられている。

花菖蒲は端午の節句の五月五日には早咲種の薄紫と白の二種しか出てこない。濃紫色、赤紫、白、ピンク、紫と、白が色々な形に染めわかれた品種は旧暦の五月に咲くのだが、それは現在の新暦の五月の末から六月の初旬になる。皆さんが花菖蒲の見物にお出かけになるのも多分その頃だろう。

明かるい空の光を障子に映して花菖蒲を立て、その白さが額紫陽花（がくあじさい）の薄色で冴えるのが五月の爽やかさである。

南子　花型／盛花　花材／花菖蒲（はなしょうぶ）、額紫陽花（がくあじさい　淡紫・淡紅）、オクロレウカの葉　花器／かいらぎ鉄彩大鉢 木村盛伸作

六月

弥勒菩薩

仙溪　背景／国宝・広隆寺弥勒菩薩　花型／杜若一色立花　花材／杜若、河骨（こうほね）　花器／蓮花文三花瓶

子供が仏像を正視して、その表情に関心をもち始めるのは小学校の高学年になってからのことだろう。その年頃、私は両親に連れられて、奈良や京都の社寺や博物館によく出かけた。

私が初めて興味をもったのは、法隆寺で仏像の下にうずくまる鬼の姿だった。その情けなさそうでいてユーモラスな顔に親しみを感じたことから他の仏像への目が開いたのだが、子供心にも印象の強かったのはやはり広隆寺の弥勒菩薩と興福寺の阿修羅像である。

広隆寺は京都では太子さんとして親しまれているが、久しぶりに入った山内には新しい霊宝殿が建って、そこに諸仏が安置されていた。内部は普通の寺宝の展示館や博物館と全く趣が違っていて、仏殿と言った方がよいだろう。自然に仏像に合掌したくなる佇いである。

弥勒菩薩は中央の壇の上に半迦の姿勢で腰掛けておられるが、その右下に聖徳太子からこの尊像を拝領して広隆寺を建立した秦河勝夫妻の像が飾られている。御夫妻は千四百年前の謹厳な表情で私達を迎えてくださったので、私達はお許しを得て花包みを解いて杜若をいけ始めた。最初のうちは長年仰ぎ見て来た菩薩像に花を供える喜びにひたっていたが、いけ進むに従って緊張が強まってくる。私の横で、深い信仰心に支えられてこの菩薩像を彫り上げた仏師の敬虔な目が、花を挿す手を見つめているような気がするのである。仏師が何を諭そうとするのか、私は教えを乞わなければならない。

素子　背景／自宅表座敷　花型／盛花　花材／板屋楓（いたやかえで）、アスチルベ、笠百合、桔梗（ききょう）　花器／染付大鉢

仙渓　花型／盛花　花材／太藺(ふとい)、縞葦(しまあし)、重楽(どくだみ)、京鹿の子、鳴子百合、
仙翁(せんのう　白・朱)、柏葉紫陽花(かしわばあじさい)　花器／古信楽足付水盤

古い町家造りは冬の京都の底冷えには弱いが、蒸し暑い夏はかなりうまくしのげるようにできている。

まず、町並みの構成上各戸の日照部分が少ないこと（悪く言えば日当たりが悪いのである）。表から裏まで部屋が一列に並んでいるので、障子や襖を簀戸に入れかえると、僅かな風でも家の中の淀んだ空気が入れ替わって気持ちがよい。そして畳の上に網代を敷いて夏を迎える用意をし、床の間には大きな水盤に冷たそうな水をたっぷり注ぎ、涼しそうに花をいける。

この頃は盛んに山草や野草が栽培され、花屋でも鉢植えでたくさん売られている。上の盛花も太藺以外は全部鉢植えの野草で、必要なだけ切り取っていけたあとは庭に植えかえている。

だが所構わず植えこんでしまうので、「庭の風情がこわれてしまいます」と出入りの庭師はよい顔をしてくれない。

素子　背景／自宅内玄関　花型／自由花　花材／薄(すすき)、鉄線(白・紫)　花器／内玄関水溜め

鰻の寝床のような縦長の町家の中には、その片側に通り庭という大屋根まで吹き抜けの細長い土間が、表口から裏庭まで一直線に走っている。

昔はどこの家でも、その中程が台所になっていて、井戸、流し、おくどさん（竈）が並んでいたが、ガス水道が完備された現在、その三つはすべて無用の長物となって、元のまま残している家はほとんどなくなってしまった。

だが、それらを取り壊したあとをどうすればよいのか、うまく始末をつけた家は多くない。幸い私の家では先代が、そこに花をつけておくために水溜めを作っていたが、私はそれを御影石で造り直し、同じ石材で下窓をあけて季節の花を飾れるようにしてみた。

吹きこむ微風に花が揺れ、筧の水音が奥まった町家の静かさを更に深める一隅に変わってきたようである。

素子　花型／投入　花材／バンダ、白紫陽花　花器／ヘレンド花瓶(ハンガリー)

ＬＳＤやメスカリンによる幻覚症状を再現したような色彩、いわゆるサイケデリック調、略してサイケ調やサイケ族が話題になり始めたのは十五年ぐらい前のことだったろうか。

その頃から色彩に対する嗜好が少し変わってきたようである。ある人はそれを一時的な流行に過ぎないと大して関心を示さず、ある人は新しい創造として定着させようとした。

現在では当初のサイケ調そのもののような色調は見られないが、日常生活の多くの部分で影響の跡が感じられる。悪く言えば従来の配色の価値基準を乱したことになるのだが、良く言えば色彩の選択の幅をひろげたということなのだろうか。

私達二人は、自分の育って来た過程で身につけた色彩の価値基準に従って花をいけ続けている。

いけ花でもサイケ調を表現できなくもないのだろうが、流行の全盛期は過ぎてしまった。私達は相変わらず好きな配色をいけている。

素子　花型／盛花　花材／白花スイートピー、トルコ桔梗(ピンク・紫)　花器／マイセン カットグラス

七月 屏風祭り

仙渓　背景／伊家屏風飾　花型／立花　花材／桜(もみ)、杜若、松、源隗、仙鶴、枯幹、流木、木種　花器／古立花瓶　屏風／「猿図」鈴木松年

祇園祭に山や鉾を巡行に出す町内を山町、鉾町と呼んでいるが、私の住んでいる町内も浄妙山が出る山町である。

私も父の没後この町内に戻ってきて、毎年祇園祭の手伝いをしているが、外側から見ていたときとは違って、内側の一人として参加し始めてから、祇園祭が私自身の年中行事の一つになってしまったようである。

十七日の巡行に先立つ十四日から十六日までの宵山の三日間、山町、鉾町の町会所に山や鉾に用いる染織品や工芸品が公開されるが、中には私の町内の浄妙山の主神筒井浄妙の着用している、重要文化財に指定された室町時代の鎧とか、その頃輸入されたベルギーのタペストリーが飾られている。

それを見てまわるだけでも美術工芸品の生きた面白さに触れることができるが、なかでも山町、鉾町の町家の屏風飾りが興味深い。

虫籠窓と出格子に閉ざされた古い町家も、宵山の三日間は格子を外して屏風を立て毛氈を敷き、花をいけて年に一度だけその暮らし向きをのぞかせる。

山町、鉾町の住人のほとんどは呉服問屋である。そしてその御主人達は仕事柄画家との縁が深いので、かなり多くの絵画を所蔵しているようである。明治以後、宵山に格子を外して屏風を飾る家が多くなって、祇園祭の別称を屏風祭とも言うようになった。

飾られた屏風には、その家の好みが否応なく出ているものだが、私のお向かいの伴さんはよい屏風をかなり集めていて毎年変わったものを出しておられる。昨年は鈴木松年の狼図を出しておられたが、この絵は私も好きなので、それならということで立てたのが、この樅を真にした立花である。

墨一色の凄絶な画面だが、よく見るとこの二頭は雌雄なのだろうか。画調に合わせて決めていた取り合わせに、仙翁の朱色をまじえたのも、二頭の間に通い合うほのかな温かみを感じたせいかもしれない。

素子　花型／投入　花材／葡萄、カラー（黄・白）　花器／彩文花瓶 柳原睦夫作

大分昔のことになるが、初めてフランスの葡萄畑を見たときがっかりした。ワインの名前にはシャトー何々と、お城に住んでいる貴族の名前がつけられているので、その葡萄畑も豊かな緑に覆われた楽園みたいなところと思いこんでいたのだが、低くて太く、不格好に伸びた枝にばさついた葉と、色の悪い葡萄の実が密生したむさ苦しい木だった。

葡萄の木はもっと美しいはずだと、岡山の師範の人の経営するマスカットの温室を見せてもらった。なるほどフランスの葡萄園とは比較にならないくらい葉も実も瑞々（みずみず）しいが、蔓は窓と天井の桟に磔（はりつけ）にされたように括（くく）りつけられて、痛ましい姿である。そんな想いで眺めていたら、「葡萄をおいけになりたいのなら私が作ってあげます」と翌年大きな鉢が届いた。

一枝とってこの投入ができた。残った枝は来年もまた房をつけるだろう。

素子　花型／投入　花材／矮竹（だんちく）、立葵（たちあおい）5色、女郎花（おみなえし）
花器／雲藍条紋花瓶 森野泰明作

賀茂川の葵橋から少し上手の堤に、誰が植えたのか、毎年立葵が花を咲かせる。

桜や欅（けやき）の新緑の木蔭に立ち並んだ背の高い茎に臙脂（えんじ）、紅、淡紅、白と同系色の花が咲き揃うと、道端に置いておくのがもったいないくらい上品な花に見える。

永らく日本の花だとばかり思っていたこの優しい花の故郷は地中海東部で、イラン、インドを通って中国に入ったのはかなり古い時代のことらしい。

中国を経て日本に入ってきたのは室町時代に入る少し前のことだが、故郷を出てから日本に来るまでに数百年、あるいは千年以上かかったのかもしれない。

古い時代の植物の移動は食料や医薬品としての必要性で原産地から方々に伝播していくのだが、立葵にも何か薬効性成分が含まれているのだろうか。もし花の美しさだけで古い時代に移動が行なわれたのだとすると夢のある話である。

人間の大脳は手を動かすことによって発達してきたのである、と聞いて長い間手仕事をし続けてきたのだが、指の骨が太くなっただけで、頭の方は全然期待に応えてくれていない。

花をいけるのはもちろん手仕事だが、それ以外にも色色と自分で作らなければならないものもある。先代も私も決して器用な方ではないが、大きなものも小さなものも、面倒臭がらずに作ってきた。

この頁でご覧になっている竹籠も、こんな感じのものを方々の竹細工屋で捜したのだが、見付からないので自分で作ってしまったものである。自分用の花器は、作りながら徐々に浮かんできたアイデアが加わって、最初に考えていた形よりかなり変容してくるが、気に入ったものができる。図面を描いて竹細工屋に作らせるより、その方が良いと、この笙（しょう）の笛のお化けのような竹の吊籠（つりかご）は箱に入れて大事に蔵にしまっている。

この大きい竹籠には、野山に力強く茂る夏の草花をいけて、屋外に吊るして人を迎えたい。

手仕事好きは長男の和則にも伝染して、暇ができると何か作るものはないかと待ちかまえているようである。

仙溪　背景／自宅表玄関格子戸　花型／吊り花
花材／薄、鹿の子百合、秋海棠（しゅうかいどう）　花器／煤竹吊籠（自作）

仙溪　背景／自宅茶室前庭　花型／吊り花　花材／黄花グロリオーサ、為朝百合（ためともゆり）、矢筈薄（やはずすすき）、猿取茶（さるとりいばら）　花器／煤竹吊籠（自作）

八月——北山から伏見へ…賀茂川

ちょっと年配の京商人は、夏になると未だに扇子を持ち歩いている。

一昔前まで商談中、扇子でも使わなければ落ちついて算盤も弾けなかっただろう。

うまく話がまとまって相手を招待するのが鴨川の床である。

江戸時代には、鴨川の流れの中に床机を持ち出して川岸の料理屋から取り寄せた酒肴を涼しく楽しんでいたが、この頃は、西岸の御池通から五条までの間の河川敷の上を流れるみそぎ川の上に、川沿いの料理屋からさし出された高い床の上で夏の趣向を楽しむようになった。

日の高いうちは日射しをさえぎるものもなく、直射日光に喘いでいた鴨川の流れも、日が傾くと元気を取り戻し、上流の北山あたりからやってきた川風が床の客に「一日お疲れさまでした」と語りかける。

風は花の間をくぐり抜け、流れに沿って伏見まで川下りしていく。

素子　背景／鴨川鮮　たん熊本家　川床　花型／盛花　花材／鐘馗水仙（しょうきすいせん）、木槿（むくげ）、沢潟（おもだか）の葉　花器／嘉靖年製水盤（清代）

三年ほど前、ドイツの古都ケルンの博物館で古代ローマのガラス工芸展を見た。ケルンはローマ帝国の植民都市だったので、多くの遺品が発掘されている。多分その発掘品を中心に方々の博物館の所蔵品を集めて展示したのだろう。二世紀から三世紀頃のものが主になっていたようだが、現代ガラスの母型がすべてそこに揃っているのではないかと思えるほどバラエティに富んでいた。中でも好きだったのは、ローマのサンダルを模して作った酒瓶である。どんな人が作らせて、どんな顔でそのサンダルのワインで酔ったのだろう。

ガラスは紀元前六〇〇〇年代から作られていたとも言われているが、メソポタミアやエジプトで紀元前二〇〇〇年以上前から作られていたことは確かである。

伝説としては、フェニキアの商人達がイスラエルのベールス川のあたりでパン焼の竈（かまど）を作るとき、適当な石がなくて商品の天然ソーダの塊を使ったところ、川岸の砂とうまく溶け合ってガラスができたのがその起源だということになっている。

鉄線を挿したのは現代のイスラエルのガラス花瓶である。表面は釉薬（うわぐすり）のかかった陶のような感じだが、非常に薄いのでこれがガラス花瓶かと思うほど軽い。これが古代イスラエルのガラス製品とどういうつながりを持つのか知らないが、そのうち世界でも重要なガラス工芸の中心地の一つになるのかもしれない。

素子　花型／投入二瓶節　花材／鉄線3種、ペゴニアの葉　花器／イスラエルグラス（右）、ペネシアン・レースグラス（左）

立花（りっか）は九つ、生花（せいか）は三つの役枝で古典花型が構成される。花型が初めから決められているのは没個性的でよくないという考え方もあるが、反対に決められた型を尊重しながら、いつの間にか表われてくる自分らしさが古典いけ花の魅力であるとも考えられる。

また古典いけ花では花型が決まっているが、そのためかえって植物の自然な姿が重視される。型の中に取り入れられる草木の生態が充分に観察されたうえで、それぞれの特徴を抽象化して一つの花型にまとまる。出生という生態を無視していけた場合、形はよくても、それは単に視覚的バランスを作ったというだけのことでいけ花にはならないのである。

仙溪　花型／生花二瓶鮒　花材／木曜芋（くわずいも）、白ジンジャー、デンドロビウム・ファレノプシス　花器／白斑文花器二瓶　近藤豊作

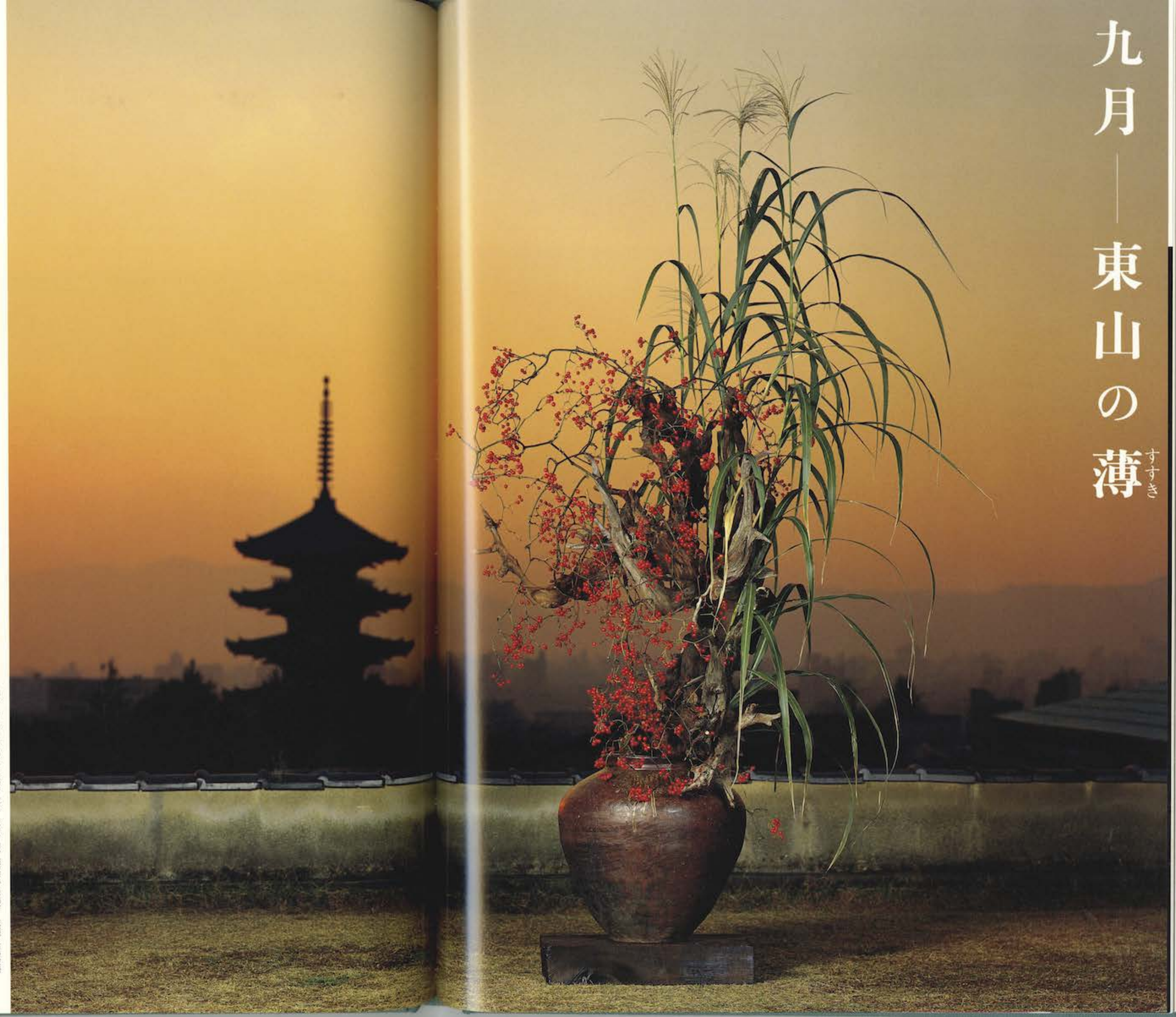
仙溪　花型／盛花　花材／蓮（白・淡紅）　花器／ボヘミアン・カットグラス

蓮の蕾は夏の朝早く、空が明かるみ始めた頃開き始める。第一日目は先が少し開いただけで、午前八時頃閉じてしまう。

二日目は夜中の一時頃から咲き始め、朝九時頃にはまた閉じてしまう。蓮はこの日が最も色が美しくなり、香りも高くなって形良く開く。品種あるいは栄養状態によって多少の違いはあるかもしれないが、蓮の花の見頃というのは二日目の花の朝九時までなのである。

毎年土用の頃になると洛南の蓮池に蓮の花を切りに行っているが、昇りかけた太陽の光の中で形良く開いた高さ二メートル近くもある花を見上げていると、心身共に豊かに育った美しい女性のようで、ほんのりなまめかしい。私の愛してやまない花である。

九月——東山の薄（すすき）



東山から眺める京都の夕景は、中秋になると市中の火照（ほて）りも冷め、これから晩秋にかけて日ごとに色合いが深まっていく。

この日、夕方まだ早いうちに、月の出を待ちながら薄をいけ始めた。

ここから西を向いて薄をいけると、近景の八坂の塔を間において、紫に霞む西山が遠景として絶妙な位置に横たわっているのである。

京都は東山、北山、西山が、都会としての広がりを適度な大きさにおさえている。四季の自然が育てた風物を自分に与えられたものとして暮らしていけるのは、そのまとまりのよい地形のお蔭であろう。

いけ上がった薄の裾（すそ）もとから夜の京都がひろがっていく。真下は祇園、鴨川をこえて河原町から四条通りを西に走り、桂川を越えて西山の麓で夜景は消え、黒い帯のような西山で京都の町は終わる。

仙演　背景／八坂の塔　花型／投入　花材／薄、猿取茨、松枯幹　花器／古丹波壺

幕末から明治初年にかけてヨーロッパへ輸出された日本の百合から多くの栽培品種が作り出され、百年以上たった現在、それらの百合がオランダから日本に大量に輸出されている。

ヨーロッパでは花の色上がりがよく、大きければそれだけでフラワーデザイン用の需要に応じられるので、栽培業者はある程度まで葉や茎の健全な成長を無視し、バイオテクノロジーの技術まで駆使して大量生産しようとする傾向が強い。

オランダ産のチューリップが輸入され始めた頃、花の美しさにひかれて買いはしたものの、茎が弱くていけ花に使えるようなものではなかったが、最近少しよくなってきたようである。

私は、いけ花とフラワーデザインの花の使い方の違いは、俳優とファッションモデルとの違いによく似ているのではないかと思う。俳優は演劇という場の中で人間を演じようとする者であり、いけ花に登場する花は、いけ花という場の中で自然を演じ得る花でなくてはならない。

そして花をいける者は演出家として一輪、一輪の花の資質、言いかえれば自然をよく知ったうえで役柄をふりあてて、一幕の芝居を完成させなければならないのである。

この頁に使ったルレーブも、原種が日本の百合であることを知っていれば、あららぎとも良い取り合わせになるのである。

仙溪　花型／投入　花材／百合（ルレーブ）、あららぎ　花器／卵形陶花器 宇野仁松作

毎日見慣れて暮らしていると、京都を囲む三方の山は当たり前の存在で、別に変わった山とも思えないが、小学校の頃、その麓に住んでいた神戸の六甲山とは何となく違うし、隣の滋賀県の山とも同じような感じがしない。

なだらかな起伏の続く東山は、市内東南部の伏見の稲荷山から始まって、市の北側を通って西の嵐山松尾山につながっていく。

いずれも町の中心からでも手の届くような範囲内にあるおだやかな山である。京都の文化はこの三方の山に見守られて育ってきた。ちょうど酒を造る桶のような役割を果たしてきたのではないかと思う。

桶の中で木の香を含んでこくのある酒が醸し出され、そのこくのあるうま味が周囲の桶にしみこみ、千二百年間酒と桶とが渾然一体となって熟成し続けてきたのが、京都の町と三方の山の間柄ではないのだろうか。

一つの文化は外からの影響を受けて様々に変容していくが、その変貌の仕方は風土に大きく作用される。また良い文化が醸成されるためには良い桶が必要だが、その桶は中身の酒の味がしみこむものである。私一人の思いこみかもしれないが、京都の山々がどことなく感じが違うのはそのような理由からだろう。

仙溪　花型／投入　花材／蔓蔵草(つるどくだみ)、晒菜升麻(さらしなしょうま)、山鳥兜(やまとりかぶと)　花器／紫紅彩陶花瓶 加藤敬雄作

花伝書を辿っていけ花の歴史をふり返ってみると、花型や植物の出生に関する記述は詳細に教えているが、配色についての記載はいたって手短かなものである。書中の花型図も彩色されたものは少なく、そのほとんどが墨一色の木版画である。

高さや奥行は寸法で正確に表示できるが、色彩を言葉で説明するのはかなり難しい。

色彩を言葉で正確に説明できるのは白と黒だけであとは大雑把な表現しかできない。

それでも立花は使う枝数が多いので、例えば正真に紫色の花を使ったら、すぐその前に立てる花は黄色か淡紅色にするべきだと、配色の説明にかなりの行数を割いていたが、江戸時代前期の立花の全盛期が終わって後半の生花の時代に入ると、花型を構成する役枝の数が立花の九枝から三分の一の三枝に減り、一種挿か二種挿で事足りるようになったので、配色に関する記述はたいして必要としなくなった。その代わり簡素な花型にすべての植物をあてはめなければならないので、出生の観察は立花の時代より更に精緻をきわめるようになった。

百年前と比べて、花材の種類が非常にふえたうえに色彩の強い花を多く使うようになった現在、いけ花には未だに色彩に対する配慮が形の構成に比べて遅れているようである。

素子　花型／投入　花材／アンスリウム、フォックステイル　花器／ベネシアン・レースグラス

十月——庭掃除

82-83頁の作品：素子　背景／自宅内玄関　花型／自由花　花材／楓紅葉（かえでこうよう）、黄糸菊、白小菊　花器／内玄関水溜め

私の生家は、父が楓傘居と名付けていたほど、楓の多い家だった。二、三十本ある楓の大木は、新緑の季節になると、庭を覆う枝から翡翠色の光が部屋の中に射しこみ、棚のように幾重にも張り出した枝の間を風が吹き抜けてくると、深い山間の涼やかな香を感じさせる。

だがやはり楓は紅葉を心待ちに植えこむ庭木である。夏のうち旱が続くと秋の紅葉の照りが悪くなるのではないかと気になり、朝夕冷えこみ始めると、もうそろそろと梢を見上げる。

庭の紅葉は、山で見る紅葉とはまた違った美しさがある。苔の上に散った葉は紅の色がくっきりと浮かび上がり、泉水から玉石の上を流れる落葉は秋の深まりを告げるようである。

散り落葉の美しさは、よく手入れされた庭のよさである。だがその美しさを保っておくため、庭掃除に追いまわされる毎日だった。時には客好きだった父のために、弟の俊介と一緒に一日二回も広い庭を掃き清めなければならないこともあった。それぐらい手間をかけてようやく、点々と散る落葉で秋の苔庭に風情が出るのである。

内玄関の水溜めにいけた素子の紅葉は、共に見つめた庭の秋をうつしとろうとしたものか、琳派の秋草図の華やかさに、底に沈んだ黄葉の静かさが加わって季節の味わいを深めている。素子の庭紅葉に対して、私の紅葉一色の立花は山紅葉という感じであろうか。

楓は、昼の間秋晴れの好天が続き、夜間の冷えこみが強くなってくると梢や日当たりのよかった部分から次第に紅葉し始め、中程が赤らむ頃には梢の葉が散り出して、裸になった枝が秋空に突き出るようになる。

流祖初代冨春軒の著「立花時勢粧」（一六八八年）の楓の項には、「紅葉は瓶上に高雄の山をうつして峯より染め」とある。楓は山頂から順に麓の方に紅葉していくので、紅葉一色の立花は上部に紅葉を配し、下部には緑を残した枝を使うように教えているが、楓の大木は一本の木でも上部と下部では色のつき方が違っている。

先代とは、秋になると毎年私の生家へ紅葉を切りに行ったが、先代の著「桑原専溪の立花」の中の紅葉一色の立花は一本の楓からとった枝をそのまま上下に使っているので、全く写実と言えるいけ方なのである。

私もそれに習っていけたのが、この紅葉の立花なのである。

仙渓　背景／鹿亭証券閣　花型／紅葉一色立花　花材／楓紅葉　花器／鮑色釉花瓶 清水六兵衛作

一つのものを使いこなす遑（いとま）もないうちに、もっと性能のすぐれているという新製品が出てくる現代に住んでいると、変わらないもの、不動なものを求める気持ちが強くなってくる。

人類が現代の文明に直接つながる文明を持ち始めてから約一万年というところだろうが、初期には千年単位の変化しか見られなかった人類文明は、変化の単位を百年、十年、と縮めて現代に至っている。例えば私の生まれた昭和初期から現在までの六十年間の技術文明の変化の総量は、武家政治の始まった鎌倉時代から江戸時代の終わるまでの約七百年間に相等するのではないだろうか。私は鎌倉時代の人の十倍の変化を一生のうちに経験しなければならないのである。

科学技術文明はこれだけの変化をしたのに、精神生活、とくに人間関係は、七百年前の「徒然草」に出てくる人物はおろか、二千年前のギリシアのテオフラストスの「人さまざま」に描かれている人間模様から一向に変わっていない。

現代人がストレスを起こしやすいのは当然のことであろう。

その現代人の満たされぬ空間を埋めるものとして与えられる宗教は、三千年前から同じことを聞かされるだけであまり信頼感が持てないし、芸術は産業革命以来、新しい事は良い事だという風潮に支配されて目紛（めまぐ）しく変化を繰り返している。私は自分自身の心の乾きを潤すためにも、古典調、自然調な花をいけているのであろう。

山溪　花型／三株分生花　花材／枯蕨（かれあし）、杜若、白小菊　花器／万暦年製水盤

稲や麦の仲間には狗尾草（ねこじゃらし）、雀茅（すずめがや）、烏麦等雑草も多い。

ところで雑草と呼ぶと、雑草にもちゃんと名前はあります、とたしなめられることがある。雑草というのは、水辺の草本植物を水草、野の草本植物を野草と呼ぶように、その植物の生存可能な地域が、農耕地や村落、都市の周辺など人間の手で自然が作り変えられた場所にしか育たない植物のことなのである。雑草はそれらの土地から人間が退去すると、そこに徐々に他の植物が侵入し、やがて消滅してしまう植物で、人里植物型の雑草と耕地植物型の二つに分けられている。

抜いても抜いても執拗に生えてくる雑草は、人間相手には強いが、野生の自然には弱い中途半端な植物であるらしい。

あまり綺麗な花が咲くわけでもないのに油断していると、手入れした庭にもどんどん侵入してくる雑草は蔑視されているが、その対極で美しさを讃えられているのが蘭である。

蘭はついこの間まで文字通り高嶺（たかね）の花で、アメリカ映画で立派なケースに入った蘭をプレゼントする場面も遠い外国の話でしかなかったのに、今では世界で最もたくさん蘭の売れる国になってしまったのではないだろうか。

黍（きび）と取り合わせた胡蝶蘭も、すっかりおなじみの花として結婚式やパーティーの会場になくてはならない花になった。

素子　花型／盛花　花材／黍（きび）、蕣黍（ほうききび）、胡蝶蘭（白・ピンク）　花器／陶製ボウル（フランス製）

十一月

烏丸通（からすまどおり）

この菊一色の立花の背景の洛中洛外図は東山を描いたもので、中央に豊臣秀吉が建立した方広寺の大仏殿が大きく描かれている。この大仏殿は十六世紀末の僅かな期間に地震や火災に遭い、その後衰微しているので、秀吉在世中の東山の風景だろう。

大仏殿の左上に清水寺。門前の通りが菊一色の立花の流枝の下を通って、胴の真後の三十三間堂につき当たっている。その左上は智積院で、そこから七条通が三十三間堂の左を通っている。絵が更に続くとすると、屏風の下端あたりが鴨川で、立花の花台の右前の角あたりが前の頁の盛花をいけた東本願寺の門前になるのだろう。

大仏殿は、豊臣秀頼によって再建中の一六〇二年に再び焼失するが、同じ年、東本願寺が徳川家康の寄進をうけて建立されている。そして東本願寺門前の烏丸通は、応仁の乱ののち荒廃していたのを、豊臣秀吉が再開させた道路である。

東本願寺の門前の銀杏は十一月の中旬輝くような黄金色に染め上がる。菊づくしの立花や盛花のいけられるのは、日本で古くから育てられてきた上品で香りの高い品種の出揃う十月下旬から、文化の日をはさんで十一月の中旬までの間だけなのである。

十月には紅葉、十一月には菊一色と、二人で同じ花材を取り上げて、古典的な立花と現代の自由ないけ花とを並べてみると、花型の相違をこえて、底に流れる美意識は一致しているようである。

90・91頁の作品：素子　背景／烏丸通　東本願寺の前　花型／盛花　花材／菊8種　花器／デルフト紀水盤　ザールバーグ作（オランダ）

仙渠　花型／菊一色立花　花材／菊7種　花器／紫紅彩花瓶　宇野仁松作　屏風／洛中洛外図屏風

仙溪　花型／自由花　花材／柘榴（ざくろ）、無花果幹（いちじくみき）　花器／白金彩瓢壺 森野泰明作

果物は、いけ花の方では実物（みもの）の部類に入れられているが、小さな実のなる梅擬（うめもどき）や南天等は、枝のまま投入や盛花に使われる。大きいものは実だけを平鉢や盆の上に飾る盛物に用いられてきた。

盛物には果物の他に野菜も加わるが、蓮根、芋、筍等力強い生命感の美しさを具（そな）えたものが多い。

私の家の近くには観光客まで見物に来る錦小路（にしき）があり、八百屋や果物屋の中でも一級品を揃えている店には、食べるよりも飾っておきたいようなものが並んでいる。

日本はおそらく世界で最も美しい野菜を作っている国だろう。ヨーロッパやアメリカの野菜はただ大量に無雑作に積み上げられているだけで、売り手と買い手の間で納得のできる価格に合わせた商品に過ぎないが、日本人はその上に野菜に美しさを求める気持ちが大変強いようである。

素子　花型／投入　花材／木瓜、貴船菊（きぶねぎく　別名：秋明菊）　花器／トルコブルー鳥壺 宇野仁松作

素子　花型／投入　花材／烏瓜、モンステラの葉、アンスリウムの葉　花器／白色釉花瓶　市川廣三作

人趣味ではなく、明快でロビーにても置けばいいようないけ花である。

中国の文人達の盛物は日本に取り入れられても発展していく要素を持っているが、ヨーロッパ絵画に静物画として描かれている果物はまだしも、野菜は天井の梁から吊るされた兎や雉と一緒に描かれているところを見ると、厨房という生活の一部をモチーフにしたもので、野菜そのものを見据えたものではないように見える。

盛物という言葉は元来神仏へのお供え物のことで、現在でも神前の三宝には形のよい大根、人参、薩摩芋、蓮根等が洗い浄めてのせられている。それをそのまま渋い盆の上に置きかえれば日本的な座敷飾りの一つになる筈だったが、なぜか江戸時代末期に文人画家達が中国趣味を取り入れるまで一般化せず、野菜類が床の間に飾られることはなかったらしい。

素子　花型／盛物　花材／カトレア、アロカシア、柘榴、木彫果実
花器／瑠璃釉細口花瓶　清水正次作、木製トレイ（スペイン　ヴァレンティ社製）

中国では早くから果物や野菜を籠や陶器の鉢に盛られた絵画が出現しているが、日本の盛物はその亜流として江戸時代の文人画家達が取り入れたものだが、彼等の絵画ほどよくできてはいなかったであろう。ところが江戸文人達の盛物を、いけ花の方で取り上げ、その後洗練されて現在に至っている。

カトレアと柘榴を盆に飾った上の型式も広義の盛物だが、高踏的な文

素子　花型／投入　花材／フォックスフェイス、紫蘭（むらさきづる）
花器／白斑文花瓶　近藤豊作

十二月——神様方の師走

クリスマスには、こんな飾りつけをしたのだが、ボストンで買ってきた人形の顔は、もう十年ぐらい先の私の顔だと、娘達は笑いころげている。

年の瀬は神様方もお忙しい。クリスマスがすむと門松を立て、除夜の鐘でおけら参りをすませるともう初詣が待っている。

素子　花型／盛花　花材／薔薇（ばら）3種　花器／紙箱　人形／クリスマスキャロル人形（ボストン製）

気候の移り変わりのゆるやかな京都の秋は長い。

周辺の野山に生きる草や木も少しずつ姿を変えながら、静かに冬に向かって歩を運んでいく。

地蔵盆が近づいて、穂を出しかけた薄の細葉を揺らせる風に秋が兆し始める。

秋の彼岸の頃、花背の山で秋草を探しているうち夕方になると、汗がひいて肌寒くなる。

十月二十二日の時代祭には、庭の山茶花の蕾は今にも咲きそうに蕾の先が赤くふくらむ。

本願寺門前で黄金色に輝いていた銀杏も、報恩講の終わる十一月末には散りつくしてようやく初冬に入る。

八月の末から十一月の末までの三か月は、長いとも短いとも言えない。ただ目の前を去来する風物に温かい関心をよせていれば、季の徴が豊かに心をふくらませ、その年与えられた秋の三か月は長かったと言えるのではないのだろうか。

十一月に咲き始めた紅山茶花が咲き揃う十二月には、白侘助の大きな木に小さな花が咲く。

私の家の庭はあまり広くはないが、椿が十種と山茶花が五種植わっている。椿の白侘助以外は全部年を越してから咲くのだが、咲く順番は正確なもので狂うことがない。

庭に椿や山茶花が咲くと、どうしてわかるのか、街の真中の私の家の庭に、小さな渡り鳥が蜜を吸いにやってくる。

明け方まで書斎で仕事をしている窓の外を、一群、二群と、それぞれ鳴き声の違う小鳥が通り過ぎていく。優しい羽音を立てながら……。

素子　背景／新井邸ダイニングルーム　窓外に北山を望む　花型／盛花　花材／椿5種　花器／ベネシアングラス

枯枝が風雨に晒されたり、流木が岩に削られて肉がそぎ落とされたものの中には、自然の中に住む、何か霊的なものの手で造られたのではないかと思うほど、気高い姿に見えるものがある。ヘミングウェイも「海流の中の島々」の一節でそれに近いことを書いている。

立花ではそれを晒木（しゃれぼく）とよんで古くから使っているが、晒木を主材にした立花は今までにはなかったようである。

この立花は四、五年前に私の個展の時、水墨画の感じを花で表現してみようと考えて立てたものである。

険峻な岩山の中に、点景のように描かれている庵の中に独座する文人、それは中国文人の理想の姿であろうが、立花にも幾分か共通した一面があるのではないかと思う。

晒木の立花に私の姿を描きこむとすれば、正真（しょうしん）の牡丹の蕾の左ぐらいの場所だろうか。

この頃そんなことを想い浮かべながら立花を立てにかかることが多くなってきた。

仙渓　背景／旅亭延命閣　花型／晒木立花　花材／晒木、寒牡丹、薩摩寒蘭（さつまかんらん）、あららぎ、朱木瓜　花器／燻焼花瓶 矢野敦一作

仙溪　青鷺／深見邸台所　花型／荒神様供花　花材／枝垂柳、松、南天の実、白小菊、つげ、牡丹枯枝　花器／荒神様花瓶

雪の上賀茂神社から一年間の京都のいけ花を書き綴ってきた。

京都の風物は月を追って肌理(きめ)こまかく私達の暮らしを彩(いろど)り、その彩りを下敷に、私達はこれからもゆっくりと季節を見つめながら花をいけていこうと思っている。

一年がかりで「花ふたり」のために撮り続けた写真と、ここまで書いた原稿を読み返してみると、まだ京都の一部分しか触れていない。大きい年中行事の陰にかくれた小さな習俗の面白みも描いてみたいし、街の表情もとらえたい。

十二月は南座の顔見世で始まり、古くからの行事が今でも一つ一つ守り続けられている。

年の瀬のしめくくりとして、深見家の通り庭に残された古いお竈(くど)さんに素朴な立花を供え、過ぎ去った京都をふり返る一瓶としてみた。

作品解説

作品制作中の桑原仙溪、桑原素子夫妻

10—11頁
作者—仙溪
花材—白梅、紅梅、松、水仙、椿、晒木（しゃれぼく）
花器—青銅砂鉢
花型—立花砂の物
背景—上賀茂神社立て砂

私の立花は花材の種類はなるべく少なくしている。立花には役枝が多く、それぞれの役割に適当な花材がある。だが形造りに追われて花材の種類をふやしていくと形は整っても見所の定まらない立花になってしまう。この立花は咲きかけた梅の枝が、空の高みから舞い降りる雪を受ける姿を考え枝数少なく神前に供えたものである。

12頁
作者—仙溪
花材—枝垂柳（しだれやなぎ）、杜若（かきつばた）、躑躅（つつじ）、椨（とが）、椿、枇杷（びわ）の葉
花器—白金彩花瓶　寺池静人作
花型—立花
背景—掛軸／塩川文麟

枝垂柳は冬の花材として私の最も好きな花材の一つである。一本の大枝を色々な角度に傾けて四方から眺め、良い形を構成する四、五本の枝を見定めてからそのまま立てておき、他のすべての枝も挿し終わってから先にきめておいた枝を損なうような枝を切り取り、重なる枝は撓め直して形を整え、下段には緑を豊かに挿し添える。

13頁
作者—仙溪
花材—水仙、山茶花（さざんか）
花器—青銅香爐
花型—水仙一色立花
背景—掛軸／塩川文麟

水仙一色の立花には前置に寒菊や金盞花を用いるのが慣わしだが、先代の好みを再現して山茶花を使ってみた。

花型は行の行型で、葉に自然についた蓚が生きてくるように曲がった葉には素直な葉を添えたり同じような葉を長短に使うとか多くの葉の中から選んだ葉で一株ずつ違った形に組んで一瓶にまとめる。

14頁
作者—仙溪
花材—五葉松
花器—飛天文青銅立花瓶
花型—生花

五葉松の生花に盆栽仕立てのような枝葉を整えたものがよく使われる。格好よくいけ上がるが、どう見ても造り物のような感じになる。私の使ったのは野生の五葉松で、一本の松としての形は悪いが幹から枝へ丹念に目を通していくと求めていた姿が思い浮かんでくる。そこで一気に枝取りしていけ上げたのがこの一瓶である。

15頁
作者—仙溪
花材—五葉松
花器—雲藍条紋花瓶（うんらんじょうもんかびん）森野泰明作
花型—松一色立花

松一色の立花には黒松、赤松、五葉松を枝葉の色と形によって適材適所に使い分けて一瓶の変化を求めるのだが、この松一色の立花は五葉松だけしか使っていない。その代わり葉の疎らな枝とよく繁った枝、幹、枝の太さや形の違うものを選んで組み合わせている。花型は行の草、逆勝手の請流枝である。

17頁
作者—素子
花材—カトレア（白、ピンク）、仏手柑（ぶっしゅかん）、シンビジウムの葉
花器—康熙年製瑠璃釉花瓶（こうきねんせいるりゆうかびん）
花型—投入
背景—自宅床の間　掛軸／竹内栖鳳
（初出掲載　講談社「ソフィア」一九九〇年一月号）

色鮮やかな黄金色の仏手柑の奇異な形は、文人達にも愛された。その実はかなり重いので、どっしりした花瓶に低く左右に振り分けて安定させる。存在感の強い仏手柑には先ず濃いピンクのカトレアを華やかに添え、きつい色調を白いカトレアで調和させ、シンビジウムの葉で伸びやかさと奥行をとり、初春の喜びを華麗にまとめた。

18—19頁
作者—素子
花材—杉、小手毬（こてまり）、連翹（れんぎょう）
花型—吊り花
背景—伏見稲荷大社

標の杉に因んだ杉玉は、太針金で作った枠の中にオアシスを入れ、杉の小枝を隙間なく挿しこんで丸く形を整える。朱塗りの鳥居の直線的な奥行に、緑の杉玉は対照的な美しさである。早朝の森然とした稲荷山の参道に吊るした杉玉に黄色い蝶が飛び交うような連翹と白い小手毬の花を垂れ下げて挿すと、初午の賑わいを感じる。

21頁
作者—素子
花材—枝垂柳、寒牡丹（かんぼたん）、オンシジウム
花器—李朝白瓷壺（りちょうはくじつぼ）
花型—投入
背景—新井邸書斎より仁和寺、東山を望む

私の友人新井たま子さん宅の書斎から遠望できる御室仁和寺、比叡山を背景にして、閑談の場にいけた花である。

まだ芽吹かない枝垂柳は中ぐらいの長さの枝を選んで静かな風情に挿し、寒牡丹は品のよい白花一本にほんのりした薄紅の花一本を添え、オンシジウムの黄の花色で暖かみのある雰囲気を作った。

22頁
作者―素子
花材―アネモネ、黒芽柳
花器―ガラス鉢（レッド、ブルー）ドン・ゴンザレス作（アメリカ）
花型―盛花二瓶飾

白い陶板二枚に赤と青のガラス鉢を乗せ、前後にずらせて広がりと奥行を作っておく。二つに分かれた器にやわらかな繋がりをもたせながら多彩な植物の襞を見せようと、左の赤い鉢には赤、右奥の青い鉢には紫をかためて挿し、左右に白のアネモネを加え、その丸い塊から抜け出すように濃色の黒芽柳を立ち上がらせた。

24―25頁
作者―仙溪
花材―フィロデンドロン、白花アイリス、アマクリナム、アマリリスの葉
花器―中東藍彩文花瓶・黒色陶鉢
花型―生花二瓶飾

里芋科の植物の中には生花に使いたい葉が多い。ここに使ったフィロデンドロンの他にモンステラ、不喰芋、アンスリウムなどをよく使うが、葉の扱いは擬宝珠に倣えばよい。留、控には花物を使う。

アマクリナムは花と一緒に葉が手に入らないので、近縁のアマリリスの葉を借葉として利用した二瓶飾りである。

26―27頁
作者―素子
花材―枝垂桃（しだれもも）、麦
花器―煤竹（すすだけ）掛花器・朱塗長水盤
花型―掛花・盛花
背景―自宅床の間

色褪びた享保の雛は飾るたびに傷みが目立つ。時折、人形師の店に治療に出して、私の幼い日の想い出を辿りながら、毎年ちんまり床の間にお座りいただいている。

枝垂桃は煤竹で掛花に、雛の屏風の代わりは朱塗の水盤に挿した三十本の青麦。娘達の素直な成長を祈る、三月三日の雛祭りである。

28―29頁
作者―仙溪
花材―木瓜（ぼけ）、梅苔枝（うめこけえだ）、牡丹、あららぎ、裏白の木
花器―方型染付花器　市川廣三作
花型―立花砂の物
（花の名流展出品作　高島屋京都店）

この木瓜は根元が9cmもあり、庭木だったそうだが、長い間手入れされていなかったので枝が複雑に絡みあって野生状態になっていた。その自然状態を損なわないよう枝の整理は最少限にとどめ、請には対照的な梅の枯枝を取り合わせた。正真は岩のような晒木の空洞から出して、古庭の春を想わせる立花とした。

31頁
作者―仙溪
花材―白木蓮（はくもくれん）、朱木瓜（しゅぼけ）
花器―印花文花瓶　近藤豊作
花型―投入二瓶飾
背景―南禅寺山門

南禅寺の古寂びた山門の下に立って仏堂越しに東山を望むと、ここが禅の聖域であることをしみじみと感じる。ここに花をいけるなら大きく白木蓮をと、朱木瓜を添えて持ちこんだ。高さ2mほどにいけ上げ、かなり大きいつもりが山門の偉容にすっぽり包みこまれて、白木蓮は春の日射しを受けて静かに咲き続けていた。

33頁
作者―素子
花材―フリージア（黄、紫、白、ピンク）
花器―メキシコ民芸ガラス花瓶
花型―投入

フリージアは花の多彩な美しさと、柔軟な曲線を描くやさしい草花で、緑葉にも潤いがある。このガラス花瓶の水の透明な輝きを出すため、葉と茎の根もとは揃えて、器の水も美しく見せたい。フリージアの軽快な花形に合わせて、花瓶も繊細な感じの下部に広がりのあるものを使った。

34―35頁
作者―仙溪
花材―桜、牡丹、枝垂柳、松
花器―飴色釉花瓶　清水六兵衛作
花型―立花
背景―清水寺本堂

桜は日本人にとって特別な花で、桜の立花には松や伊吹など限られた花材しか取り合わせてこなかったほどこの花の性格を大切に扱ってきた。選んだ桜は花のつき方の多い里桜の一種で、ちょうど若葉を出しかけた枝垂柳を添えると都の春らしい取り合わせとなる。正真の濃紅色の牡丹で全体の色をひきしめた。

36頁
作者―素子
花材―チューリップ8種
花器―白色陶水盤　竹内真三郎作
花型―盛花

チューリップはユリ科の植物で、最も代表的な球根花でもある。品種も多く多色で、近頃はオランダからの球根が輸入され、日本で品種改良した新種も毎年出荷される。チューリップは葉の間からの花茎が長いのでその軽やかな姿をとらえて全体の構成を自由奔放に作り、モダンな明るいカーテンを背景に四月の紺碧の空の感じを出した。

39頁
作者―素子
花材―アマリリス、白百合（カサブランカ）、カラジウム
花器―斜縞紋ガラス花瓶（フランス）
花型―投入

朱赤のアマリリスと白百合、二種類の大輪花を組み合わせて大らかにいけてみた。

大きな紅白の花を並列させただけでは色紙を重ね合わせたように平面的である。いけばなは立体感が大切なので、花と花、花と茎、葉の間に必要な空間と広がりが要る。植物は多様なので、その草木の出生をしっかりと視つめることだ。

40―41頁
作者―素子
花材―石楠花（しゃくなげ　紅、白）、岳樺（だけかんば）
花器―藤蔓製の箕（み）
花型―盛花
背景―上賀茂神社楢の小川

夜更けの上賀茂神社の楢の小川のほとり。高山の大木、岳樺の屈曲した古枝に、初夏の山を彩る石楠花を添え低くいけて、小川のせせらぎに映る星空のかすかな光を見せる。

白川砂の上にそっと置かれた石楠花の花が、ほのかな明かりに浮かび上がると、それは「源氏物語」の世界なのかもしれない。

42―43頁
作者―仙溪
花材―藤、牡丹
花器―「影風」宮下善爾作
花型―投入
背景―大田の沢の杜若

大田の沢は大田神社の境内にある。夕暮時深まった杜若の紫を背景にすると、藤の淡紅色と牡丹の濃いピンクまでがくっきりと浮かび上がる。

藤も牡丹も水揚げがよくない。藤は太枝を選び、いける直前に切って充分水を吸い上げさせてから挿し、牡丹は切口を炭化するまで焼いてから手早くいける。

44頁
作者―仙溪
花材―牡丹
花器―大弦籠　小菅公長齊作
花型―生花

牡丹は真上に半開、副に開花、留には固い蕾を見え隠れに用いることになっている。

そして葉を多く、腰を低くとってどっしりした姿にいけるのが習いとされている。葉は花の軸についているだけでは足りないので、別に葉株を挿し加えるが、葉は多い目につけておき、いけ上がってから整理する。

46頁
作者―仙溪
花材―あやめ
花器―ガラス鉢　岩田糸子作
花型―生花

あやめは花茎が細いだけでなく、葉が薄くて幅も狭いので、剣山にも七宝にも留めにくい花材である。花型は杜若にならって作り上げていくのだが、真、副の葉は自然のまま組み直さずに挿し、胴、留と低くいける葉は組み直す。

花は五本、七本と数多くいけ、葉組は花の数より二組か四組多く作って形を整える。

48、49頁
作者―素子
花材―花菖蒲（はなしょうぶ）、額紫陽花（がくあじさい　淡紫、淡紅）、オクロレウカの葉
花器―かいらぎ鉄彩大鉢　木村盛伸作
花型―盛花

清々しい沢辺に蘆や水草などが生い繁る中に、白い花菖蒲が咲き乱れる五月下旬――自宅の和室にその風情を考えながらいける。

水面を見せるために大きな水盤を用い、自然のありのままに無造作に立ち上がらせた。

水の縁には額紫陽花で心地よい涼感を表してみた。

50―51頁
作者―仙溪
花材―杜若、河骨（こうほね）
花器―蓮花文立花瓶
花型―杜若一色立花
背景―国宝・広隆寺弥勒菩薩

杜若一色の立花で前置まで杜若で統一する花型を真の一色とよんで、この立花のような前置に他の水草を取り合わせたものを行の一色とする。杜若一色の立花は水仙一色の立花と同様に花型の大部分が葉で構成されている。そこで葉に手を加えなければならないが、なるだけ控え目にしたい。この杜若も素直にいけ弥勒菩薩に供えた。

53頁
作者―素子
花材―板屋楓（いたやかえで）、アスチルベ、笹百合、桔梗（ききょう）
花器―染付大鉢
花型―盛花
背景―自宅表座敷

京都の六月。昔から座敷は衣がえの季節である。先ず障子をはずして簾を掛ける。襖やガラス障子は簀戸と入れ替える。畳には網代を敷く。いけばなも衣がえしたい。そこで若緑色の板屋楓に、淡いピンクの笹百合とアスチルベを添え、やさしい色あいを紫の桔梗で爽やかに引きしめてみる。山あいに咲く草木の姿を想いながらいけた。

54頁
作者―仙溪
花材―太蘭（ふとい）、縞葦（しまあし）、重薬（どくだみ）、京鹿の子、鳴子百合、仙翁（せんのう　白、朱）、柏葉紫陽花（かしわばあじさい）
花器―古信楽足付水盤
花型―盛花

六月に入ると水草や野山の草花をいけて、部屋の中にその爽やかな涼しさを取り入れたいと思うようになる。

太蘭と縞葦の水際に、赤と白の斑入の珍しい重薬を添えると、風通しよくいけた水草が一層涼しげに見え、間に水面をあけて山草四種を挿して、気持ちを山に移すという初夏の盛花である。

55頁
作者―素子
花材―薄（すすき）、鉄線（白、紫）
花器―内玄関水溜め
花型―自由花
背景―自宅内玄関

内玄関の三和土のところに小さな水溜めがこしらえてある。筧の水が薄の葉に伝い落ちて、薄がゆらゆらと動いている。水面にいけた鉄線も同じように揺らぐ。雨上がりの陽の光が下窓から差しこんで、のんびりとした静かさである。水の音、揺れ動く花、この二つを調和させ、美しい眺めを出してみたかった。

56頁
作者―素子
花材―バンダ、白紫陽花
花器―ヘレンド花瓶（ハンガリー）
花型―投入

六月の梅雨どきに美しく咲く大輪の紫陽花。大きな花の重みで撓む枝の動きをとらえて、その変化を花型のポイントとする。

清楚な白色と、少し緑がかった紫陽花に、紫色のバンダを高く伸ばして清涼感を出す。器には細かい模様が描かれてあるので、花の形は反対にダイナミックな構成にした。

57頁
作者―素子
花材―白花スイートピー、トルコ桔梗（ピンク、紫）
花器―マイセン　カットグラス
花型―盛花

初々しいスイートピーの小花に、薄紙を幾重にも重ねたような軽やかなトルコ桔梗。スイートピーの白花の可憐さと、トルコ桔梗のピンク、紫の絞りになったような色の対照は、ガラス器の濃い紫色と同調して、優しい音色を奏でているようだ。器と植物が渾然一体となるように考えた。

58～59、61頁
作者―仙溪
花材―樅（もみ）、杜若、松、躑躅、仙翁、枯幹、流木、木槿（むくげ）
花器―古立花瓶
花型―立花
背景―伴家屏風飾　屏風／「狼図」鈴木松年

猛獣を描いた日本画で狼という画題は大変珍しい。狼の恐ろしさは背景の佇いが加わって見事に表現されている。この絵の背景の感じに合わせられる花材として、真には風雪に晒された樅の梢と靖流枝には枯幹と流木を使い、下段は躑躅でまとめた。狼の棲む深山の物寂しい絵の雰囲気に、かなり近づいたのではないかと思う。

62頁
作者―素子
花材―葡萄、カラー（黄、白）
花器―彩文花瓶　柳原睦夫作
花型―投入

倉敷市に住む師範の中には果樹園を経営している人があり、この葡萄も観賞用にと鉢植えで送ってくださった。逞しく伸びた蔓と葉に、可愛い鮮緑の実がついている。葉を高く上部で繁らせて、重みのある実とのバランスをとり、夏の樹蔭に立ち止まるかのようにカラーの白花、黄花を立たせてみた。

63頁
作者―素子
花材―暖竹（だんちく）、立葵（たちあおい）5色、女郎花（おみなえし）
花器―雲藍条紋花瓶（うんらんじょうもんかびん）　森野泰明作
花型―投入

中国から室町時代に渡来した立葵は、私の先祖が遺してくれた立花の伝書に絵として描かれている。立葵はその名のように真直に立ち上がり、短い生命であるが、夏の陽光に向かって色彩豊かに花を咲かせる。暖竹は水辺に生育する高さ七mもあるイネ科の植物で、この二種類とも直立させ、黄色の女郎花を添えて優しい味わいとする。

64頁
作者―仙溪
花材―黄花グロリオーサ、為朝百合（ためともゆり）、矢筈薄（やはずすすき）、猿取茨（さるとりいばら）
花器―煤竹吊籠（自作）
花型―吊り花
背景―自宅茶室前庭

この自作の大きい竹籠は床の間用ではなく、夏の間軒先に吊るして大きく草花をいけて客を迎えるために作った。この籠花は表座敷の外にグロリオーサの黄花、為朝百合など、色の明るい花を主材にして夜もはっきり見える色を選んだ。そこに揺れる葉が爽風をつげる薄と、ようやく実を結んだ猿取茨の実の初々しい緑を添えた。

65頁
作者―仙溪
花材―薄、鹿の子百合、秋海棠（しゅうかいどう）
花器―煤竹吊籠（自作）
花型―吊り花
背景―自宅表玄関格子戸
（初出掲載「NHK婦人百科」一九八九年九月号）

こちらの吊り花は自宅の中門の前に下げてみた。中門から35mほど離れた路地には石畳を敷いている。表門から細い路地の奥に吊ったこの花を見ると、トンネルの先の景色を見るような感じが大変美しい。とくに赤い鹿の子百合が焦点のようにくっきりと目を射る。

古い家が次々に取り壊されていくが、この美しさは守りたい。

66―67頁
作者―素子
花材―鍾馗水仙（しょうきずいせん）、木槿（むくげ）、沢瀉（おもだか）の葉
花器―嘉靖（かせい）年製水盤（清代）
花型―盛花
背景―鴨川畔　たん熊本家　川床

鴨川の清冽な水音を背景にして涼味を出す。薄暮の光の中に、風になびく沢瀉の小さな薄緑の葉。朝に咲いて夕方にしぼむ命のはかない木槿は、白色の一重で底に紅の色が混じっている。黄色の鍾馗水仙は沢瀉の葉茎と木槿の間に立って、なかだちとして色を引きしめる。真夏の草花は萎れやすいので短時間でいけ上げ潤いをもたせる。

69頁
作者―素子
花材―鉄線3種、ベゴニアの葉
花器―イスラエルグラス（右）、ペネシアン・レースグラス（左）
花型―投入二瓶飾

40cmの高さのガラス花瓶と、ごく小さなガラス器で躍動感のある花をいけた。鉄線は名称のように茎が蔓性で針金に似て細く硬いので、左右前後に伸びやかに入れる。左側の下部には量感としてベゴニアの葉で膨らみをつける。二つのガラス器はブルー系統なので、白、紫、赤紫、緑の花色で夏の花らしくあっさりとまとめた。

70―71頁
作者―仙溪
花材―不喰芋（くわずいも）、白ジンジャー、デンドロビウム・ファレノプシス
花器―白斑文花瓶二瓶　近藤豊作
花型―生花二瓶飾

家の庭で、夏の太陽と雨を存分に受けて、しっかり葉を広げた不喰芋をのびのびといけてみた。

この二瓶飾りの取り合わせ三種はすべて熱帯系の植物だが、古典的な生花の花型にうまくおさまっていきいきしている。古くから生花に使われていた花材の他に新しい花材の出生をよく観察して私のレパートリーを広げていきたい。

72―73頁
作者―仙溪
花材―蓮（白、淡紅）
花器―ボヘミアン・カットグラス
花型―盛花

いけ花には普通矮性種の茶碗蓮が使われるが、私は先代の好んだ蓮池育ちの大型の蓮をいけている。いける日は早朝から蓮池に出かけて丈夫な古葉を切り集めて帰り、すぐに葉の切口から酢酸鉛の水溶液を水揚げポンプで注入していけ始める。花は午前中に閉じてしまうので、見頃はいけ終わった九時から十一時までの短時間である。

74―75頁
作者―仙溪
花材―薄、猿取茨、松枯幹
花器―古丹波壺
花型―投入
背景―八坂の塔　京大和より望む

薄の日本人に訴える情感は、いけ花にも古来様々な形で表現されてきた。私の心の中に残っている薄は、私が若い頃その麓に暮らしていた東山の薄である。見晴らしの良い山の上で、薄の向こう側に暮れていく京都の街を飽きずに眺め続けていた。晒木を骨組に猿取茨をからませ、記憶頼りに私の薄を三mの高さに立て夕暮を迎えた。

77頁
作者―仙溪
花材―百合（ルレーブ）、あららぎ
花器―朋彩陶花器　宇野仁松作
花型―投入

輸入の百合ルレーブには笹百合のような季節感はないが、そのピンクの美しさだけはひけをとらないだろう。この百合の色を充分に引き出すには花を寄せ集めていけたい。その背景には厚みと重量感のある緑がほしいので、葉の密生したあららぎを選び、右にとがった枝をつき出しておき前面を覆うようにルレーブを挿した。

79頁
作者―仙溪
花材―蔓蔵草（つるどくだみ）、晒菜升麻（さらしなしょうま）、山鳥兜（やまとりかぶと）
花器―紫紅彩陶花瓶　加藤敏雄作
花型―投入

野草の中には渡来の薬草が栽培地から逃げ出して野草化したものも多く、蔓蔵草もその一つで渡来地の長崎に多いという。

山鳥兜は姿のよい山草だが根は周知の猛毒、晒菜升麻の葉は食用、根は薬用と、野草も山草も太古から私達人類と密接に結びついて暮らしてきた。それを忘れずその姿を大事にいけたいものである。

80、81頁
作者──素子
花材──アンスリウム、フォックステイル
花器──ベネシアン・レースグラス
花型──投入

二年前の九月、まだドイツが東西に分断されていた頃、デュッセルドルフから西ベルリンへのアウトバンを走っていたら、このフォックステイルが高速道路の土手に自生していた。葉が互生する間から薄茶の和毛が伸びて、野草には珍しく明確な形である。ヨーロッパの旅の想い出を淡い色調にまとめて、追憶の虹を追いかけてみた。

82─83頁
作者──素子
花材──楓紅葉（かえでこうよう）、黄糸菊、白小菊
花器──内玄関水溜め
花型──自由花
背景──自宅内玄関

楓は、新緑の青葉の頃から夏までは瑞々しい緑色で美しく、晩秋になって露霜にあえば紅葉や黄葉に色づき、古典から現代まで風情豊かないけばながいけられてきた。また万葉時代からさまざまな楓の情景が短歌や絵画に遺されている。そこで紅葉黄葉を、散りもみおのように水溜めの水面に散らし、山の渓流の景色を取り入れてみた。

85頁
作者──仙溪
花材──楓紅葉
花器──飴色釉花瓶　清水六兵衛作
花型──紅葉一色立花
背景──嵐亭延命閣

紅葉は金屏風に華やかに映える。松の後ろには寂びた銀屏風といったところだろうか。

楓は上段に紅葉を配し、下段には緑を残した枝を使う。この紅葉一色の立花は幅が三m近いが、楓の紅葉の姿を一瓶に盛りこむにはこの大きさが必要である。苦心していけても一日しか保たないが、私には心に深く残る秋の色である。

87頁
作者──仙溪
花材──枯葦（かれあし）、杜若、白小菊
花器──万暦年製水盤
花型──三株分生花

葦の大群落が枯色に埋めつくされると、秋の淋しさよりも豊かさと温かみを感じる。夏の間しっかりと栄養を蓄えた地下茎は、その温かい枯色の下で丈夫に新芽を育てているのである。

だが一本ずつ手にとって眺めると、秋色は深い。俯いた杜若と咲き終わりかけた白い小菊を取り合わせた、三株いけの生花である。

89頁
作者──素子
花材──黍（きび）、箒黍、胡蝶蘭（こちょうらん　白、ピンク）
花器──陶製ボウル（フランス製）
花型──盛花

薄茶色の箒黍と、茶褐色に赤味を帯びた黍の、二種類を使った。

実りの秋の色感にふさわしくマッス状に直立させ、淡いグリーンの器の中に茶色の濃淡の階調を出そうと思った。直立させた黍の上の部分にふんわりと、ピンクと白の胡蝶蘭を添えて、秋の物静かな心地のよい日差しを感じさせた。

90─91頁
作者──素子
花材──菊8種
花器──デルフト釉水盤　ザールバーグ作（オランダ）
花型──盛花
背景──烏丸通　東本願寺の前

直径80cm、深さ15cmの円型のデルフト釉陶器で、作家のザールバーグさんは私達のドイツでのいけばな展に自作の器を度々提供してくださる。温厚な人柄に惹かれてつい買ってしまう。オランダの陶器と東本願寺、世界は狭くなった。真の国際文化交流ができたのではないかと思う。秋が一番美しい菊の花を、彩り豊かに盛り上げた。

93頁
作者──仙溪
花材──菊7種
花器──紫紅彩花瓶　宇野仁松作
花型──菊一色立花
背景──洛中洛外図屏風

菊一色の立花には大輪菊、中輪菊、小菊の各色を取り揃えたうえ、花が咲かず葉だけが茂る、しかみ葉の菊を胴に使う。そして切花用に栽培された一本立ちの菊だけでなく、請や流枝等横枝には自由に枝を伸ばした地植えの菊も必要である。従って菊一色の立花を立てられるのは十月下旬から十一月上旬までの極めて短期間なのである。

94頁
作者──仙溪
花材──柘榴（ざくろ）、無花果幹（いちじくみき）
花器──白金彩扁壺　森野泰明作
花型──自由花

日本の柘榴は原産地の中東のような立派な実はならない。だがその野生種に戻ったような実は秋の風情が豊かで、枝物花材としていけ花にもよく使われている。

だが細枝を大きく撓めて親に負担をかけすぎている子供のように見える。その柘榴の実を無花果の太枝につけかえると、実は楽々とぶら下がり力強さが感じられる。

95頁
作者――素子
花材――木瓜、貴船菊（きぶねぎく　別名：秋明菊）
花器――トルコブルー縞壺　宇野仁松作
花型――投入

屈曲した力強さのある木瓜は、晩秋の頃、散り残った花と大きな実をつける。四方に伸びた闊達な枝は刺があり、その交錯した枝ぶりには野趣に富んだ面白さがある。枝が張っているので、切り詰めないで自然のありのままにいける。木瓜の実は重量の配分を考えて左右に入れ、優しい白い小花、貴船菊で清楚に品よくいけた。

96頁上
作者――素子
花材――カトレア、アロカシア、柘榴、木彫果実
花器――瑠璃釉細口花瓶　清水正次作、木製トレイ（スペイン　ヴァレンティ社製）
花型――盛物

意匠的な木製の深盆に、小品花と果実を配した盛物風いけばなである。南欧のコバルトブルーの空、地中海のキラキラと輝く碧緑の水面、明るくて爽快な雰囲気に感じられるようにした。日本の秋の侘びた文人風の盛物に、柘榴と和種の蘭を添えるのも静かで風趣があるが、ときには現代調の色彩の華麗なものにもひかれる。

96頁下
作者――素子
花材――フォックスフェイス、紫蔓（むらさきづる）
花器――白斑文花瓶　近藤豊作
花型――投入

十一月になると自然の豊かな包容力の中で葉は美しく色づき、草木は競って結実する。その見事な実りの表情を表現してみた。いわば心象いけばなであろうか。色鮮やかな黄色の果実に光を当てて、特異な形の集まりを強調し、創作花器からはみだした紫蔓は、大地の下から球茎の芽が溢れ出ているような自然の逞しさを見せる。

97頁
作者――素子
花材――烏瓜、モンステラの葉、アンスリウムの葉
花器――白色釉花瓶　市川廣三作
花型――投入

熱帯性の、大きな面を持つ緑の葉を一種、その葉の面を主体にして変化のある形をとらえてみた。モンステラは蔓性で、アンスリウムはハート形で葉柄が長く、同じ里芋科の葉でも表情が異なるようだ。その豊かな緑葉が、蔓草の赤い実の垂れ下がる烏瓜と、白色の花瓶をやわらかく包みこみ、器も植物の一部分として考えている。

98－99頁
作者――素子
花材――薔薇（ばら）3種
花器――紙箱
花型――盛花
人形／クリスマスキャロル人形（ボストン製）

クリスマスキャロルを口ずさむ頃、私の誕生日が近づく。ボストンに行った時この人形を主人が贈り物に買ってくれた。二個の人形の無邪気な表情に見とれていると、主人と息子が年をとった時の顔に似ているようで思わず笑ってしまう。緑、白の紙箱に、バラ三種色鮮やかに周囲の雰囲気に溶け込ませ、火を灯して楽しくいける。

100－101頁
作者――素子
花材――椿5種
花器――ベネシアングラス
花型――盛花
背景――新井邸ダイニングルーム　窓外に北山を望む

東南アジアから日本に分布する照葉樹林の中で、椿の葉は光沢があり、花には優雅な風情がある。古くは室町時代から現代に至るまで、いけばなの花材には欠かせない大切な花木として尊重されてきた。私達の自然の伴侶として限りなくいけ続けたい花である。ヴェルディの歌劇「椿姫」のように異国情緒の気分で、モダンに艶(あでや)かにいけた。

102－103頁
作者――仙渓
花材――晒木、寒牡丹、蘇摩寒蘭（さつまかんらん）、あららぎ、朱木瓜
花器――燒焼花瓶　矢野欵一作
花型――晒木立花
背景――嵐亭廷命閣

風雨に晒されて久しい枯枝にも生気がある。生の植物と違って水はいらないし、好きな所で切ったりついだり色をかけることもできるが、あまり手をかけ過ぎると自然に作り上げられた鋭さや寂びが失われて、ただのくたびれた枯枝になってしまう。枝ぶりをじっくり見定めてから一気に組み上げた晒木の左流枝(ひだりながし)の立花である。

104頁
作者――仙渓
花材――枝垂柳、松、南天の実、白小菊、つげ、牡丹枯枝
花器――荒神様花瓶
花型――荒神様供花
背景――深見邸台所

京都ではいまだに売っているお竈(かまど)さんの荒神松を、荒神さんの花瓶に立てた。備える花ばしきたりで決まっているが、私の家では大晦日はあり合わせの花で簡単な立花を作って供えていた。
家からお竈さんが姿を消して久しいが、二人で昔の記憶をたどりながら、深見家の竈の上に立てた一瓶である。

●著者略歴

桑原仙溪（くわはらせんけい）
一九二七年九月二十三日出生。一九五三年慶応義塾大学卒業。一九六八年先代長女桑原素子と結婚。一九八一年桑原専慶流第十四世家元襲名。各花道展、ＮＨＫ他にいけばなを発表。著書「京都花こころ味こころ」他。

桑原素子（くわはらもとこ）
一九三二年十二月二十四日、桑原専慶流第十三世家元桑原専溪の長女として出生。六歳より父専溪にいけばなの指導を受け、一九五〇年同志社女子高校卒業後、十八歳より花道家として立ち、後進の育成と共に、ＮＨＫ出演他、新聞雑誌で活躍。

花ふたり
京都いけばなの四季

発行日――1991年11月30日

定　価――6,500円（本体6,311円）

著　者――桑原仙溪　桑原素子

発行者――本吉敏男

発行所――株式会社 婦人画報社
東京都港区西新橋２－９－１
電話03－3501－6211（代表）
振替　東京２－40010

印刷所――凸版印刷株式会社
ISBN4-573-14208-8

©SENKEI KUWAHARA, MOTOKO KUWAHARA
Printed in Japan